

はじめに

「お金の地産地消」という言葉から、みなさんはどんなことをイメージするでしょうか。

大学卒業後、地方銀行を経てN G Oに勤務したぼくは2005年、28歳のとき故郷の名古屋に戻り、N P Oバンク「コミニティ・ユース・バンクm o m o」を立ち上げました。地域のさまざまな課題の解決に挑むN P Oやソーシャルビジネスを、「お金」と「人のつながり」で応援する団体です。

當利を目的としないN P Oやソーシャルビジネスは、社会にとつて重要な役割を担っているにもかかわらず、既存の金融機関からお金を借りることが難しく、そのため活動の継続が困難になることがしばしばあります。ぼくたちは、そんなN P Oなどに低金利でお金を貸しています。お金だけでなく、活動のP Rを手伝ったり、ボランティアを紹介したり、さまざまな人的支援も提供しています。

NPO向けの融資なんてうまくいくわけがない、無謀だ、と言われました。しかもスタッフは全員がボランティアで、ほとんど金融の知識のない若者たちばかりでしたから、大反対されたのは無理もありません。

しかし、以後の12年間、1件の貸し倒れも出すことなく、運営を続けています。一部を後に紹介しますが、限界集落の支援、子育て支援、高齢者福祉、障がい者福祉、環境保護など、さまざまな地域課題の解決に挑戦する人たちを応援してきました。

元手となるのは、主として市民のみなさんからの出資金や寄付金です。「地域のために何かしたい」という思いのこもったお金——ぼくたちは「志金」と呼んでいます——を託していただき、そのお金を活用して、地域課題の解決に乗り出したNPOやソーシャルビジネスを応援する。地域のお金を、地域をよりよいものにするための事業に回す。地域のお金を地域で生かす。これが「お金の地産地消」です。

この本は、いま着実に広がりつつある「お金の地産地消」の必要性と可能性を、実際の事例を通して紹介する本です。そして、みなさん一人ひとりにも、それぞれにできることから、「お金の地産地消」に関わつてもらいたい。そんな思いで書いた本です。

ぼくの仕事の出発点となつたのは、世の中のために自発的に行動する人たちとの出会いでした。「當利を目的としない」NPOの活動に初めて関わつたのは、25歳のとき。そこで目の当たりにしたのは、お金がもらえるわけでもないのに、時間やスキルを自発的に持ち寄るボランティアの姿でした。自らの志で、夢中になつて取り組む人の美しさに感動しました。

思えばぼく自身も、特に子どものころは、そうした持ち寄りや支え合いのなかで生かされてきました。女手一つで育ててくれた母親との二人暮らし。裕福な家庭ではなかつたので、子どものころはずつと「豊かになりたい」「お金持ちになりたい」と思つていました。大学卒業後に金融機関に就職したのも、いわゆる大企業へのあこがれがありました。しかしNPOとの出会いがきっかけで、ぼくにとつての豊かさは、お金だけではなくなりました。

「お金だけではない」と言いつつ、ぼくがお金を扱っているのは、東京でNGOに勤務していたとき、Mr.Childrenの桜井和寿さんらが立ち上げて当時大きな話題になつた、NPOバンク「app bank」との出会いがきっかけでした。

既存の金融機関では、担保があるかないか、連続して赤字を出してないかななど、過去の実績を重視しますが、ap bankでは、書類や決算書だけで判断せず、活動を担う人たちの「覚悟」や「信頼」といった「見えないもの」を信じて融資を決めていました。当然、融资する側にも「覚悟」や「本質を探る力」が問われます。「未来をつくる」とは、そもそも「見えない」「わからない」ものをかたちにしていくことだと実感しました。

そして、ぼくが未来をつくるなら、生まれ育った地元の未来をつくりたい。そう思つて、愛知県で初めてのNPO銀行「momo」を設立したのです。8年後には「あいちコミュニティ財團」も立ち上げて地域課題の解決に挑む人たちへの支援の幅を広げ、今では金融機関とも連携しながら、「お金の地産地消」を推進しています。一度は地元の金融機関をあきらめ、離れてしまつたぼくが、新しい金融の仕組みを立ち上げることになるとは、なんだか不思議な巡り合わせを感じます。

ぼくの使命（何に命を使うか？）は、持続可能な地域をつくること。この一言に尽きますが、これをmomoでは次のように表現しています。「わたしの暮らすまちで、わたくしの子や孫がずっと、暮らしていけるように」。この「ずっと暮らしていける」とい

う地域を、一つひとつ実現していきたいと考えています。

ずっと暮らしていくためには、「ずっと働いていける」仕事が必要です。その仕事をつくるためには、具体的にお金を回し、働いていける環境をつくる必要がある。この本では、そんなふうに考えて始めたmomoと、あいちコミュニティ財團による、これまでの挑戦を書きました。

実際、「ここで暮らしていきたい」と思つても、暮らしづらい世の中になりつつあることを実感する人は多いのではないでしょか。わかりやすいのは農山村地域です。「学ぶ場所がない」「働く場所がない」ということで、若者たちはどんどん田舎を離れてしまっています。

また、その田舎で育まれた水や空気、エネルギー、食料などの恩恵を受けている都市部でも、暮らしづらさを感じる人もいるでしょう。たとえば、ぼくの地元の名古屋市は、空き巣被害が全国ワースト1のまちです。みなさん一人ひとりの暮らす地域にも、さまざまな課題があるのでないかと思います。

暮らしづらさや生きづらさを抱えた当事者が、その解決をあきらめてしまうのではないか、課題の当事者だからこそ解決策の担い手になれる。そんな選択ができる社会を、NPOバンクやコミュニティ財團で実現したいと思つています。

これまでくじけそうになつたことがないわけではありませんが、それでもやつてくることができたのは、人は金銭的な見返りだけを求めて常に行動しているわけではないとということを、子どものころの体験や、NPOやソーシャルビジネスに関わる人たちとの出会いから、信じることができたからです。

わたしの暮らすまちで、わたしの子や孫がずっと、暮らしていけるように。
お金の地産地消、はじめませんか？

第1章 新しいお金の流れをつくる

いま各地で起きていること

いま住んでいる地域が「消滅」する?

共助の時代へ

お金の流れが問題だ

地域の金融機関は、地域のためになつてているのか

お金の行き先が見える金融

金融の手づくりが始まった

(コラム) NPOの“志金”、調達

108 103 100 96 91 86 83
13 17 20 23 25 29 32 36 32 29 25 20 17 13 1

第2章 過去を見るか、未来を見るか

NPOバンクmomoはなぜ貸し倒れゼロなのか

NPO銀行との出会い

地域のためのNPO銀行

50 44 41 36 32 29 25 20 17 13 1

10年間、貸し倒れゼロ
お金を取り戻す
30人で取り囲む
現場を見極める訪問調査
ソーシャルビジネスは成長分野
momorenジャーが応援します
(コラム) NPOが融資を受けるメリット
108 103 100 96 91 86 83
13 17 20 23 25 29 32 36 32 29 25 20 17 13 1

第3章 お金と人のエコシステム

地域に必要な仕事を、みんなで応援する

コミュニティ財団とは

地域内“志金”循環モデル構想

成長を助ける三つのプログラム

地域の課題を深掘りする

人がつながる仕組みをつくる

地域金融のネットワークをつくる

第4章 仕事の「価値」って何だらう

お金でないものを見つめる

社会的価値を「見える化」する

助成とは、成長を助けること

NPOに成果を求める

エンデからのメッセージ

(コラム) 自発的に社会をよくしようと行動する人、求む

第5章 小さな一步から始まる

地域課題への挑戦者たち

NPO法人ぎふNPOセンター（岐阜県岐阜市）

社会福祉法人ふれ愛名古屋（愛知県名古屋市）

株式会社ランダムネス（愛知県名古屋市）

一般社団法人しん（愛知県名古屋市）

147

149

154

160

166

139

134

131

121

株式会社スピリット（岐阜県高山市）

一般社団法人One Life（愛知県名古屋市）

NPO法人ファミリーステーションRin（愛知県日進市）

NPO法人Pakapaka（愛知県武豊町）

(コラム) “成果志向”の補助・助成金のすすめ

172

178

184

190

196

142

139

134

131

121

第6章 共助社会をめざして

誰もが当事者になる時代

誰もが社会課題の当事者になる

地域金融の原点回帰

仕事の原点

全国に広がるモデルをつくる

未来から逆算して事業をつくる

あなたにできること

237

220

217

211

209

205

203

201

おわりに